

都市近郊林の役割と保全・利用

比 屋 根 哲

(岩手大学農学部)

本セッションの本来のコーディネーターである魚住侑司氏によると、このセッションは「都市域における森林の役割と森林減少の実態に触れて、それらの保全・利用について総合的に検討することを目的」として設定されたものである。このように都市近郊林をキーワードとする幅広い研究領域を対象とした同セッションは、当日は生態学、砂防学等の多彩な研究者が集う研究集会となった。以下に同セッションにおける研究報告と討論の概要および当日コーディネーター代行をつとめた筆者の感想を述べてみたい。

中越信和氏は、広島県立緑化植物公園での二次林の植生構造を把握するために、毎木調査を含めて多様な植物社会学的な調査を実施した事例について紹介した。この中で同氏は、環境教育などを目的とした森林公園内の森林調査にあたっては、林学における毎木調査法による森林把握だけではきわめて不十分であるとし、森林の活用の仕方に対応していくつかの調査法を併せて実施することの必要性を強調した。次に河合征彦氏は鳥類および昆虫類(チョウ)を指標として都市緑地の評価を行うため、環境要素と小動物相との関連性について報告した。同氏は、今回の調査で樹林面積が大きく、環境要素がモザイク状に分布している緑地ほど高く評価されたことを紹介し、これらの群集多様性の評価指標が、地域の緑地環境の総合的評価指標として有効であること等について述べた。つぎに石井正人氏は、広島県立緑化公園内に環境教育林を造成する必要性から、アカマツが高木層を占める林分を常緑広葉樹林へ誘導するための施業法について検討し、調査地域の森林ではアカマツを択伐する等して早期に常緑広葉樹林の林分構成に近い状態へ誘導が可能であると述べた。つぎに野瀬光弘氏は、岡山県等における腐葉土生産を通した里山利用と落葉供給システムについて報告し、今後、落ち葉の入手先が農家主体から、ゴルフ場・公園などの管理作業等へ広がり、都市近郊林の役割が重要になってくると主張した。つぎに武藤信之氏は、岐阜県小原村を対象に行ったアンケート調査をもとに、防災面からみた森林の社会的評価について述べ、住民の防災意識が高い山林に接している地域と防災の危険

が少なく防災意識の低い地域とで、住民の森林評価の内容が異なっていること等について述べた。最後に箕輪光博氏は、人口密度、森林面積、耕地面積等の統計資料を用いて、都市化に伴うマクロレベルでの土地利用の変容過程について検討した。同氏は、人口密度が500人/平方kmあたりを境にして森林面積が急減する等の傾向を明らかにし、各市町村における都市化とマクロレベルでの土地利用の状況をこれらの統計資料によって簡単に把握できること等を紹介した。

以上の6氏の報告の後、コメンテーターとして香川隆英氏(森林総研)と鈴木直樹氏(札幌市役所)の報告があった。その詳細は省略するが、このうち特に鈴木氏からは札幌市における都市近郊林保全の性格について総合的な視点で分析した結果の報告があり、注目された。同氏はこの中で、形骸化している現行森林計画制度に代わる都市近郊林独自の保全と利用のための制度の確立を主張している。

予定された報告とコメントの後、約30分程度の総合討論が行われた。最後にコーディネーター代行としての本セッション全体の感想を述べれば、まず第1に本セッションは、林学会では新しい分野である都市近郊林をテーマにしたことで、幅広い分野の研究者の間で非常に有益な意見交換がなされたと評価したい。とくに多様な森林調査法の必要性等の指摘は、林学サイドに 있는ものとして新鮮かつ有意義であった。しかしながら、都市近郊林そのものが非常に多くの論点を含み、様々な研究の切り口があることから、同時にこのセッションの運営の難しさも痛感させられた。討論時間の絶対的な不足の解消をはじめ、今後いかにテーマを絞り込んで議論をすすめるかを考える必要があるだろう。この他、同時平行で行われた他のセッション(森林の保全・管理と市民、あえて森林の総合的管理について等)との競合も、当日の残念な要因であった。

最後に都市近郊林研究全体についての漠然とした感想であるが、今後の研究の深化のためには、研究者が研究対象と目的を明確に意識した上で調査方法等が十分に練られる必要があること、別言すれば都市近郊林の存在意義等に関する社会科学的な観点あるいは哲学的な検討が、我々研究者サイドの作業としてまだまだ必要のように感じられた。

以上、はなはだ不十分な紹介ではあるが、都市近郊林問題に興味をお持ちの方は是非とも今回の報告者やコメンテーターと直接コンタクトを取られることをお勧めしたい。